第40回　全日本教職員連盟
教育研究全国大会（宮崎大会）提案資料

【第1分科会　学習指導 A】我が国と郷土の歴史や伝統・文化への理解を深める学習指導

提案テーマ

地域の特色をいかした教育活動の展開

～古式捕鯨の町『通』に残る通鯨唄を中心として～

山口県教職員団体連合会
長門市立通小学校
教　諭　増山　孝史

Ⅰ　研究主題

地域の特色をいかした教育活動の展開

～古式捕鯨の町『通』に残る通鯨唄を中心として～

Ⅱ　主題設定の理由

平成18年に改正された教育基本法の前文には、以下のように述べられている。

> 我々日本国民は、たゆまぬ努力によって築いてきた民主的で文化的な国家を更に発展させるとともに、世界の平和と人類の福祉の向上に貢献することを願うものである。
>
> 我々は、この理想を実現するため、個人の尊厳を重んじ、真理と正義を希求し、公共の精神を尊び、豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成を期するとともに、伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する。
>
> ここに、我々は、日本国憲法の精神にのっとり、我が国の未来を切り拓く教育の基本を確立し、その振興を図るため、この法律を制定する。

また、同法第二条第五項では、

> 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。

と規定されており、伝統文化を継承することや、郷土愛などが重視されるようになってきた。しかし、このことを目指すには学校だけでは限界がある。そこで、地域の教育力を活用することが求められる。

本校（長門市立通小学校）は、山口県の北部、長門市にある学校である。長門市は北に海、南に山の海山の自然に囲まれた風光明媚な土地である。また、「私と小鳥とすずと」や「こだまでしょうか」などで有名な童謡詩人金子みすゞの生まれ育った場所でもある。長門市通地区は、市の北部、青海島の東端にあり、人口１０００人弱の小さな町である。漁業主体の町で、少子高齢化が進んでいる。児童数は１０人で、これは市内でも特に少なく、複式学級２学級の小規模校である。しかし、通地区には、豊かな教育資源がある。それは、古式捕鯨の町であったということである。北浦地域には、瀬戸崎（現長門市仙崎）や通など、捕鯨のための組織『鯨組』があり、その伝統を各地で残している。その中でも通地域は、古式捕鯨に関わる文化が色濃く残っている。

そこで、この古式捕鯨の文化が色濃く残る地域で、コミュニティ・スクールを中核として様々な教育活動を進めていけば、小規模校でありながらも児童が郷土に誇りをもち、地域貢献への意欲をもつであろうと考え、本テーマを設定した。

Ⅲ　研究のねらい

○ふるさと通地域に愛着と誇りをもつ児童を育成するために、地域にある素材を調査するとともに、その素材がもつ教育的意義を探り、どのように教育活動にいかせるかを考える。

○児童が通鯨唄保存会の方々とともに受け継いでいる『通鯨唄』を中心として、地域の人々と連携したどのような教育活動ができるかを探る。

Ⅳ　研究の仮説

本校において、地域に残る伝統的な文化や史跡、コミュニティ・スクール、本校独自の「通鯨海街学」の仕組みを工夫して効果的に地域の人材や郷土素材を活用することができれば、児童がより地域へ目を向けることができるとともに、さまざまな人やものとの関わりを通して郷土への愛着や誇りを深めることができるであろう。

1　地域教材の調査・開発

「地域に残る教材となり得るものの調査を行う。」

その教材のもつ意義や教材化する目的を明確にすることができ、児童の学習に効果的に活用することができるであろう。

2　地域と連携した学習活動の工夫

「学校にある地域連携体制の活用を図る。」

コミュニティ・スクールや「通鯨海街学」の仕組みを活用した取組を工夫することができれば、学校・地域・家庭が一体となって同じねらいのもと、教育活動を進めることができるであろう。

3　効果的な学びを促す指導の工夫

「地域に残る教材を使った教育活動や、長い間受け継がれている『通鯨唄』の指導の実践を図る。」

教材や人々との関わりの中で児童が自分の課題を解決しながら、より郷土への愛着や誇りをもつことができるであろう。

Ⅴ　研究の実際

1　古式捕鯨の町『通』の成立～校区に残る地域素材～

(1)　鯨組と捕鯨に関わる史跡・文化

通　鯨　組

通は古く防人が置かれた場所とされ、厳島の合戦で２番目に功績があった海賊の人々の屯所があったとされる。

大寧寺の変で、家臣陶晴賢に討ち取られた大内義隆の家臣後根壱岐守が浪人し、通に住み、生計を立てるために漁師や舟を集め捕鯨を始めたとされる。その後、延宝元年（1673）に通鯨組を藩主に願い出、防長２州で初めて本格的な捕鯨業が成

立した。網で囲い、弱ったところを銛で突く方法（網とり法）を用い、「一頭捕れば七浦賑わう」と言われた鯨を多く捕った。その多くが、出産育児のために南下してきた鯨だったため、地域の人々は鯨のいのちに感謝の気持ちと憐れみの念をもち、さまざまなものを残し後世に伝えてきた。その鯨組も、近代の銃を用いた捕鯨の流行などにより経営が成り立たず、明治40年（1907）3月に234年の歴史に終止符をうった。

鯨鯢魚鱗群霊地蔵尊

海外諸国による捕鯨が盛んになり、通鯨組では鯨が捕れなくなった時期があった。そのため、鯨組の早川源治右エ門（前出の大内家家臣後根壱岐守の子孫）が、獲れなくなった責任が自分たちにあるのではないかと考え、捕った鯨をまつり、再び鯨が捕れるように祈り向岸寺に建立したとされる地蔵である。

早川家住宅

早川家は、代々通鯨組網頭（あみがしら）や裏方役人を任じられた家柄である。豪放な雰囲気であり、漁師の住宅としてふさわしい建物である。国指定重要文化財であり、現在も早川家当主が住んでいる。当主は通鯨唄保存会のメンバーである。

くじら資料館

くじら資料館は、通地区に残る捕鯨の道具（市重要有形民俗文化財）を展示している。また、捕鯨の歴史や様子だけではなく、捕鯨に生きた人々の様子も垣間見られる資料館である。また、屋上には、平成14年に当時の天皇皇后両陛下ご臨席のもと長門市で開かれた豊かな海作り大会にて、山車として曳かれた鯨が展示されている。なお、館長は本校学校運営協議会会長である。

写真1）くじら資料館全景

くじらまつり

毎年7月に行われるのが、くじら祭りである。これは、古式捕鯨の実演や通鯨唄の披露が行われる。当時の様子が再現される数少ない機会である。このとき使われる鯨の船は動力を使って動き、潮を吹く。また、台車もついていて、引き上げられる様子まで再現される。この鯨の船の髭は、実際のヒゲグジラのものである。

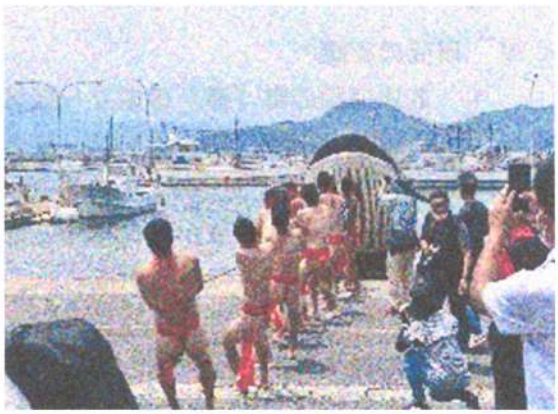


写真2）鯨の船

⑵　鯨を弔う史跡等

青海島鯨墓（国指定史蹟）

鯨組創業時の向岸寺五世讃誉上人（網頭の一人池永家の出身）は、延宝７年（1679）に清月庵に観音堂を建立して、捕獲した鯨の回向を行っていた。元禄５年（1692）年には、鯨組の頭領らによって捕獲した鯨の胎児を埋葬した鯨墓が建立された。ここには、元禄５年から明治初年までの鯨の胎児を埋葬しており、集落のすぐ近くで捕獲されたこともあってか、鯨に対する憐れみの情は特に強かったことが推測される。

写真３）青海島鯨墓

鯨位牌および鯨鯢過去帳（山口県有形民俗文化財）

天文７年（1573）開山の浄土宗向岸寺に安置されている。鯨一頭一頭に戒名、鯨の種類、獲れた日などを記録し残してある「鯨鯢過去帳」や、鯨をまつった「鯨位牌」で、人間と同じように弔っていることから見ても、鯨に対する感謝と憐れみの念が見てとれる。

鯨回向

毎年４月に向岸寺で行われている鯨の法要である。延宝７年（1679）に讃誉上人が始め、現在も行われている。当時の仏教界では、人間以外に絶対に回向はできなかった時代であり、世界でも類を見ないものである。

通鯨唄（長門市無形文化財）

長州藩直営の通鯨組の人々が、大漁を祈ったり、祝ったりし、すべての集いに歌いならしてきた労働歌であり祝い唄である。当時の鯨組は藩の水軍の役割もあったため、規律を重んじ礼儀を尊び、勇壮果敢を旨とした。その反面、誠に愛情深く、哺乳動物でもある憐れみと報恩感謝の真心が込められている。この思いから、歌うときには手をたたかず、「揉み手」で行われている。これは、全国に残る鯨唄でも珍しいものであり、通鯨唄保存会によって伝承されている。

写真４）保存会による通鯨唄

2　学校・地域・家庭が一体となった教育活動

(1)　やまぐち型地域連携教育（県）とみすゞ学園（市）の取組

山口県では、全国に先駆け、令和２年４月に各小・中・高等学校および総合支援学校がコミュニティ・スクール（学校運営協議会）を設置している。この仕組みをいかして、「やまぐち型地域連携教育」の推進（図１）が図られている。これは、中学校区を中心とし校区内にある小学校各校が『地域教育ネット』の仕組みを活用しながら教育活動を展開することとなっている。この活動では、【地域とともにある学校づくり】【学校を核とした地域づくり】がねらわれており、目指す方向性として、「地域コミュニティの創造」「地域の担い手の育成」「子育て支援の充実」が設定されている。また、コミュニティ・スクールの機能の充実も図られ、その中に、「地域貢献（地域のよりどころとなる学校づくり）」の項目もある。社会総がかりで子どもたちの学びや育ちを見守り支援する取組を推進することで、子どもたちの自己肯定感の高まり、郷土愛や地域貢献の意識の高まりなども期待されている。

本県では、人口減少の克服に向けた地方創生の取組が本格化しており、地域の将来を担う人材の育成や地域力の強化を図ることが喫緊の課題となっています。

このため、県教育委員会では、コミュニティ・スクールが核となり、本県独自の地域協育ネットの仕組みを生かして、社会総がかりで子どもたちの学びや育ちを支援する「やまぐち型地域連携教育」の充実を図り、ふるさとへの誇りや愛着をもち、地域社会の発展に貢献する人材を育むとともに、子どもも大人も地域の魅力を実感・再発見し、地域を活性化させる「学校を核とした人づくりと地域づくりの好循環の創出」をめざした取組を推進しています。

図１）やまぐち型地域連携教育の概略（山口県教育委員会『明るい未来を創る山口県の連携教育』パンフレットより抜粋）

また、長門市では、長門市で生まれ育った童謡詩人金子みすゞをもとに、中学校ごとに小中一貫教育「みすゞ学園」を形成している。各みすゞ学園が地域に即した９年間の学びを共有し、教育活動を展開している。本校は「通・仙崎みすゞ学園」に属し、学園目標を「ふるさと通・仙崎を愛し思いやりの心をもった子どもの育成」としている。本学園では、たくさんの思いやりや優しさのまなざしで詩を残した金子みすゞの出生地であり、北浦捕鯨の瀬戸崎鯨組を有した仙崎地区と、通鯨組の気質が残り、鯨のいのちに感謝と憐れみの心が今でも受け継がれている通地区ならではの学園目標といえるだろう。

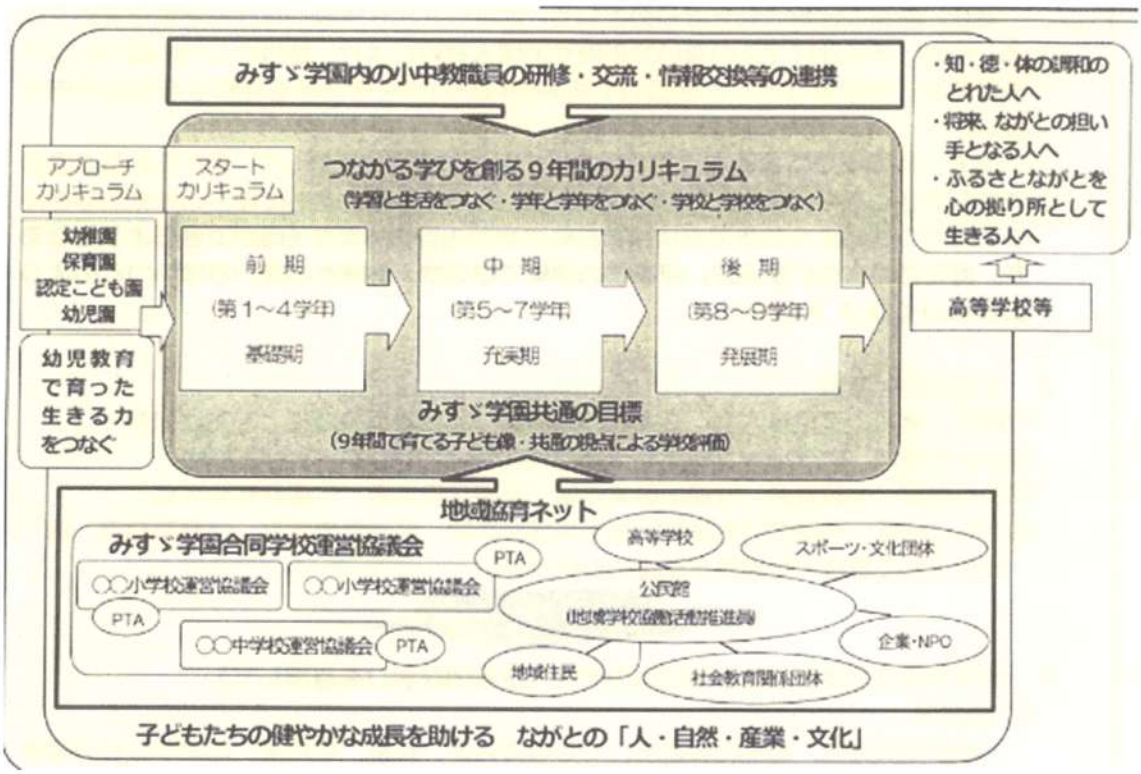


図２）長門市におけるみすゞ学園構想（長門市教育委員会「長門市学校教育基本方針」より抜粋）

この長門市におけるみすゞ学園構想の特徴は、学校と関連組織をつなぐのが、地域の中心である公民館であるということだ。地域に密着している公民館のもつネットワークを駆使して学校と地域をマッチングしている。このことで、学校が直接人材を一から探すよりも、よりねらいに即した人材を提案しつなぐことができる。また、地域からの要請も公民館から来るため、何を求められているのかを共有した活動を展開することができる。通小学校では、地域出身で教職経験のある方が公民館長であるため、学校の実態に応じてさまざまな人材をつないでくださったり、地域からの要請も教育的意義を考えてくださったりしながら活動を提案される。学校と地域がWin—Winの良好な関係を築くことができている。実際の事例として、地域の要請により、校区内にある鯨をモチーフにしたマンホールの色塗りを行った。学校としては地域貢献となった。住民からも、「町が明るくなった。」「気持ちがよい。」といった声もあり、児童は達成感を味わうことができた。児童も「またやりたい。」と、前向きな発言をしている。

⑵　実践事例１　通小学校地域連携カリキュラム「通鯨海街学」

本校では、各学年における学習内容と地域人材・素材をまとめた「通鯨海街学」を設定し、活用を図っている（図３）。

通鯨海街学

～通の子になろう～

１　ねらい

現在、鯨唄の伝承活動をはじめとして、地域の文化を体験しながら学習を進めている。地域にあるかけがえのない文化財や地域人材等により、地域の人々の暮らしぶりや歴史などを学習することを通して先人のねがいや生きざまを理解する機会を作りたい。

また、体験学習によるさまざまな文化や人々との交流を通して、子どもたちが通のまちが好きになり、通のまちを誇りに思うことができるとともに自分の未来に夢を持つことができるような学習を仕組むための学習内容の体系化**（何ができるようになるか。何をどのように学ぶか。何をどの学年で学ぶか。地域との関わりはいつどのようにしていくか。）**を図りたい。

２　主な取組・学習

①鯨唄　②海の子遠泳大会　③大越の浜清掃　④地域環境清掃　⑤和船競漕
⑥子ども神輿　⑦クリーンウォークINかよい・地引き網　⑧合同運動会
⑨つり集会　⑩敬老会　⑪通地区文化祭　⑫持久走大会　⑬書き初め大会
⑭どんど焼き　⑮なかいも活動　⑯地域施設訪問　⑰通歴史学習　⑱野菜交流　他
※全体的に学校・地域行事関連の取組が多い。

３　地域学習材を活用した学習活動の開発**（主体的な学びを目指して）**

①　海関係
- 海産物販売所、海産物製造所、くじら資料館、鯨墓、早川家、向岸寺などの見学
  （１．２．３年生の校区探検、身近な産業　　４年生郷土学習）
- 漁業従事者との交流、栽培漁業・造船所見学など（５年生社会　水産業）
- 古式捕鯨、近代捕鯨、ロシア兵の墓、観光（沖千鳥、海上アルプス、海体験）
  （４．５．６年生での総合的な学習への取組のテーマとして）

②地域施設
- 通公民館を通して人材バンクづくり　地域行事の連携。
- 通駐在所と連携した安全教育の充実
- 高齢者デイサービスとの定期的な交流　（全校、中学年総合的な学習への取組）

③通の人との交流
- 尚寿会、元四ツ葉会など地域グループとの交流
  （なかいも活動の充実　昔の道具　昔遊び）

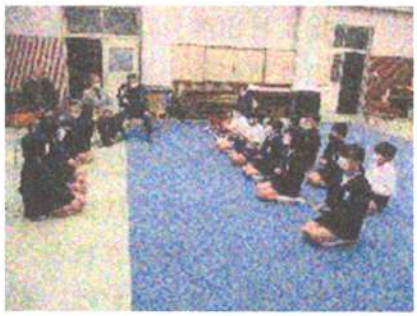
④みすゞ学園内での小小・小中・小高連携
- 鯨唄、みすゞ交流　仙崎中職場体験発表会などを通したキャリア教育交流
- 幼保小交流　大津緑洋高校との交流

⑤「持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）」を取り入れた**主体的な通の街への働きかけ**

図３）「通鯨海街学」

⑶　実践事例２　通鯨唄保存会による『通鯨唄』指導

①　教育活動における通鯨唄の位置付け



通鯨唄は、昭和５７年（1982）に、ふるさと学習の一環として通中学校（現在廃校）が伝承に取りかかった。通小学校は、昭和６２年（1987）に４・５・６年が伝承に取りかかり、今に至っている。現在では、全校児童が伝承に関わり、６年間鯨唄を歌い続けることとなっている。現在本校では３～６年１０名が総合的な学習の時間を中心に練習に励んでいる。地域合同運動会や文化祭、くじらまつりなど、さまざまな場面で発表の機会もあり、児童も堂々と発表している。地域の方からも好評で、発表を聞くことを楽しみにしている方も多い。本校では、上級生が下級生に指導をする形態をとっている。しかし、口伝で伝わっているため、節回しが変化して伝わるなどの弊害もある。そのため、年に３回程度通鯨唄保存会の会員による指導がなされている。教員も鯨唄担当教員がおり、担当教員を中心に、太鼓の指導も含め、全校体制で指導に当たっている。

②　伝承されている通鯨唄について

現在小学校で受け継いでいるのは、「祝え目出度」と「朝のめざめ」である。歌詞は次の通りである。

通鯨唄

祝え目出度（いわめでた）

祝え目出度の　若松様よ
枝も栄える　葉もしげる
竹になりたや　薬師の竹に
通栄える　しるしの竹よ
納屋のろくろに　綱くりかけて
大せみ巻くのに　ひまもない
三国一じゃ網に　今年は大漁しょ
ヨカホエ

通鯨唄

朝のめざめ

朝のめざめに　朝のめざめに　サア　ヨイヤサー
イヨ山見をすれば　イヤ大せみは　浮いて来る間にヨ
子持ちは寄せくる　サア　ヨイヤサー
イヨ刃差しは勇む　イヤ取らにや　かなわぬ
かけにやかなわぬ　サア　ヨイヤサー
イヨー通の沖で　イヤかけて殺して
かけて殺して　サア　ヨイヤサー
イヨー通の浦へ　イヤこげとよいやならば
こがにやかなわぬ　サア　ヨイヤサー
イヨー田の浦の浜の　イヤ納屋のろくろにゃ
納屋のろくろにゃ　サア　ヨイヤサー
イヨ綱くりかけて　イヤ大せみを巻くのにゃ
子持ち巻くのにゃ
ソリヤソリヤいちじゃいの　またいちじゃいの
朝もかけたがまたかける
ヨカホエ

「祝え目出度」は、どちらかというと鯨が捕れた喜びや大漁への祈りを込めた祝い唄の性質が強い歌詞である。一方、「朝のめざめ」は鯨の発見から解体までを歌詞にしている。本校児童はこの２曲を練習している。締太鼓２基でリズムを取りながら唄うのが通鯨唄の伝統である。

保存会の方は、技術はもちろんのこと、唄に込められた思いや昔の人々の思いも話されながら指導される。例えば、「朝のめざめ」だと、「鯨を見つけて、さあ取りに行くぞ。でも命がけ。でも捕らないと生活が成り立たない。捕ったら捕ったで、今度は小さな船で鯨を引いて帰らないといけない。それも大変。そのように鯨捕りの気持ちになって唄うとよい。」などと指導がある。児童は、自然と、受け継がれてきた通の人々の思いも受け継いでいるのである。

③　通鯨唄の学習を通して

上級生から鯨唄を引き継ぐ「鯨唄引き継ぎ式」

児童は、通鯨唄を受け継ぐことを大変誇りに感じるとともに、自信にもつなげている。毎年２月には、６年生から下級生へと鯨唄を引き継ぐ「鯨唄引き継ぎ式」を実施している。この式では毎年テレビ局などの取材が入る。ところが、緊張を見せず堂々と唄いきる。その後のインタビューでも、「これまで６年間大切にしてきた鯨唄をしっかり引き継いでほしい。」といったコメントが聞かれる。また、毎年必ず、「これからも学んできた通鯨唄を忘れず歌い続けていきたい。」とのコメントが聞かれる。それほど児童にとって６年間学ん

できた鯨唄に愛着をもつとともに、誇りと自信につながってきたのだろうと考えられる。他にも、５年生は毎年、仙崎小学校と合同で社会見学を実施している。その一環で通地区をガイドした際、計画になかった鯨唄を急遽唄うことになった。突然の事ではあったが、本校の児童は２名でありながらも、大きな声で堂々と唄いきった。これには、仙崎小の児童や教員も驚きを隠せず、歌い終わった後には、大きな拍手が送られた。本校の児童は、鯨唄に大きな自信と誇りをもっているからこそできることだと考える。

仙崎小児童の前で鯨唄を唄う児童

⑷　実践事例③　５・６年　特別の教科　道徳

～詩「鯨法会」（金子みすゞ）【内容項目Ｄ　生命の尊重】～

『鯨法会』

鯨法会は春のくれ、
海に飛魚採れるころ。

浜のお寺で鳴る鐘が、
ゆれて水面をわたるとき、

村の漁師が羽織着て、
浜のお寺へいそぐとき、

沖で鯨の子がひとり、
その鳴る鐘をききながら、

死んだ父さま、母さまを、
こいし、こいしと泣いてます。

海のおもてを、鐘の音は、
海のどこまで、ひびくやら。

金子みすゞ全集　JULA出版

①　教材選定の理由

金子みすゞの父・庄之助は通地区出身である。そのため、みすゞは少なからず通地区との関わりがあるといえる。特に幼少時は通にも訪れ、向岸寺の檀家だった父の影響で、鯨回向の様子なども知っていると考えられる。みすゞ自身、いのちを大切にする通の町の影響は受けているはずである。また、みすゞの一家は、信仰心に厚く、地元の寺院の法要等には進んで参加していたようである。このようなことから、みすゞの詩には、小さなものにもいのちを見いだすやさしいまなざしが向けられていると言えるだろう。また、みすゞは幼い頃に父を亡くし、この「鯨法会」には、父の姿を重ねていたのかもしれない。

この詩は、通小学校近くの向岸寺で行われているもので、現在も続いている通地域ならではの行事である。「鯨法会」を通して、生命尊重の精神を学ぶとともに、このような考え方を受け継いできた通地区への愛着と誇りをもつことができればと思い、この教材を選定した。

② 活動展開

○ ねらい

・金子みすゞさんの詩「鯨法会」を読み、さまざまな視点から鯨への思いを話し合うことを通して、よりよく生きるために、自然とともに生きていることへの感謝と、生かされているいのちを大切にしようとする心情を養う。

・通地域の捕鯨に関する考え方に触れることを通して、ふるさと「通」に愛着と誇りをもつことができる。

仙崎小に掲示してある金子みすゞの写真

○ 準備物

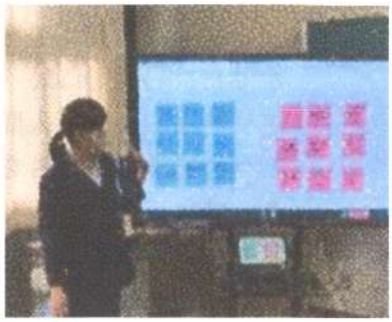
・一人一台端末　・大型モニター

・詩「鯨法会」(提示用)

○ 活動の流れ

	学習活動　・学習内容	○指導上の留意点　◎評価
導入	1.通の街に残る捕鯨ゆかりの史跡・行事を想起する。 ・身近にある史跡・行事との関わり	○場所を挙げさせ、共通点は何かと問うことで、捕鯨と通地域、生活との関わりを想起できるようにする。
展開	2.詩を読んだ感想をもとに、さまざまな視点から捕鯨への思いを話し合う。 ・捕鯨に関わる人からの視点 ・鯨からの視点	○意見交流ソフトを活用することで、進んで交流活動ができるようにする。 ○２つの視点の違いは何かを問うことで、両親をうばわれた鯨の気持ちと、鯨を弔おうとする漁夫の気持ちを明確にできるようにする。
振り返り	3.考えを交流し、みすゞさんが詩に込めた思いを話し合う。 ・いのちをいただくことへの感謝 ・他のいのちなしでは生きられない人間のかなしさ	○みすゞさんがこの詩で伝えたかったことは何かを問うことで、いのちをいただいて生きる人間の存在に気付かせるとともに、いのちをいただくことへの感謝の気持ちやつながりを意識できるようにする。
	4.ほかにいのちをいただいて生きている場面を想起し、一人一台端末に振り返りを書く。 ・いのちの大切さ ・生かされていることへの感謝	○振り返りを即時集計・フィードバックすることで、友達の多様な考えに触れることができるようにする。

③　児童の様子（反応）と振り返り



導入では、通地域に残る史跡・文化などを挙げさせた。本校の児童にとって、鯨唄や鯨墓など捕鯨に関する史跡・文化は身近にあるものであり、多くのものが発表された。鯨法会（鯨回向）が行われている向岸寺も学校のすぐそばにある。しかし、鯨回向に関しては児童も出席した経験が無く、知ってはいるものの、どんなことが行われているかまではイメージできなかったようである。導入を通して、捕鯨に関するものが多く受け継がれていることに気付くことができた。

展開では、『鯨法会』を読み、鯨法会に向かう漁夫の気持ちと、沖で泣く鯨の子の思いを話し合わせた。出された考えは以下の通りである。

漁夫の気持ち

・鯨のいのちをいただくことで生活できることへの感謝の気持ち。
・生きるためとはいえ、いのちをうばうことへの憐み、悲しみ。
・いのちをうばった分、しっかり弔わないといけない。

鯨の子の思い

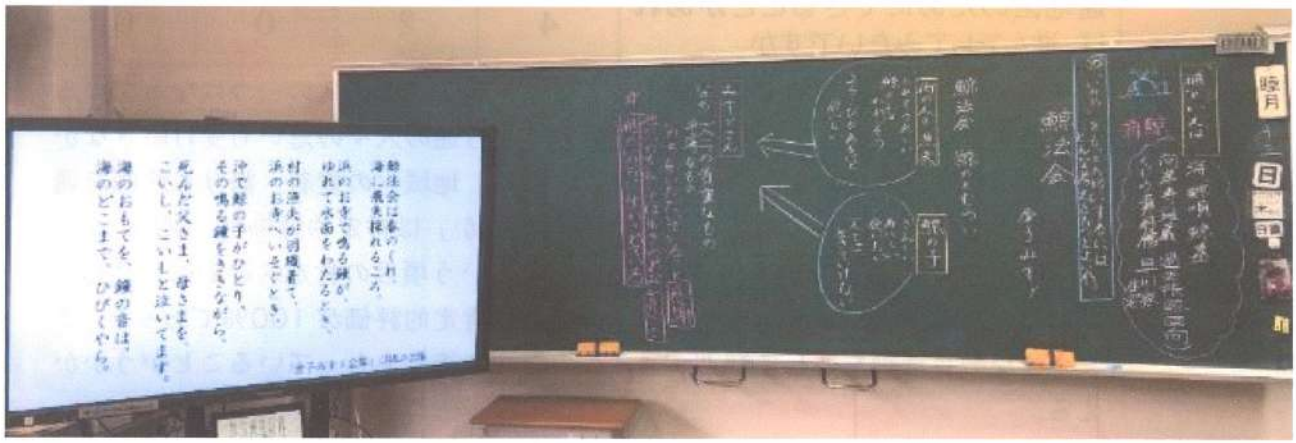
・寂しい。
・父さま、母さまにもう一度でいいから会いたい。
・なんてことをしたんだ。

子どもたちは、２つの立場を比較することで、生きる上ではいのちをいただかないといけない人間という存在を再確認し、いのちをいただいて生きていることへの感謝の気持ちを深めた。

『鯨法会』の詩を通して

○多くのいのちをいただいていることへの感謝の気持ち。
○いのちをいただくことで私たちは生かされている。
○生かされているいのちを大切にしないといけない。

ということを子どもたちなりに考えることができたように思う。



④ 考 察

いのちの大切さを考えさせた後に、『大漁』も読み聞かせた。『大漁』は、『鯨法会』と他のいのちをいただいて生きるしかない人間の悲しさや、いのちをいただくことへの感謝の気持ちを考えることができる詩だからである。特に、『鯨法会』は、今も通地域に残る文化であり、本校の児童にとっては考えを深めやすい詩といえる。みすゞさんの見えないものへのまなざしや、「私と小鳥とすずと」の中の、「みんなちがってみんないい」に代表される一人ひとりを大切にしようとする視点を、みすゞさんの詩を通してこれからも考えさせ続けていきたい。また、この授業において、「このような考え方ができるみすゞさんはすごい。」という発言があった。そこで、「みすゞさんは、お父さんが通の出身で、小さい頃遊びに来ていて、もしかしたら通の影響を受けていたのかもしれない。」と話をすると、それを誇らしげに感じ、興味関心を深め自主学習で地域の残る捕鯨文化や、みすゞの詩を調べる児童もいた。

Ⅵ 研究の成果と課題

1 成果

通についてアンケート(R5・6月実施 5・6年対象6名)【単位:人】

項 目	当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
あなたは、自分に自信がありますか	2	2	1	1
あなたは、通の町が好きですか	5	1	0	0
あなたは、通の町のことを周りの人に自慢できますか	5	0	1	0
通地区伝統の鯨唄を学んできてよかったと思いますか	4	2	0	0
通地区のためにできることがあれば、進んでしてみたいですか	4	2	0	0

児童にとって、通鯨唄を受け継ぐことはアイデンティティの一つになっているのは間違いないだろう。６年間保存会の方々から通の人々の思いも受け継ぎながら進めてきていること自体に大きな意義がある。地域への愛着・誇りも鯨唄を通して引き継いでいる。そのため、「通の町が好きか」は肯定的評価が100%だった。「通の町を周りの人に自慢できるか」という項目の肯定的評価は８３%と高かった。「鯨唄を学んでよかったか」の項目は肯定的評価が100%であった。さまざまな教育活動を通して郷土『通』への愛着や誇りをもっていることがうかがえる。

また、通地区に残る捕鯨に関する文化や史跡などの資源にも恵まれ、それらを

支える多くの地域住民に支えられていることも、児童にとってとても幸せなことである。そのため、児童も地域のために何かしたいという思いを強くもっている。「通地区のためにできることがあれば進んでしてみたいという項目」の肯定的評価も100%で、日頃の感謝を伝えたい、恩返しがしたいという意見もよく出てくる。特別なことはできないが、これまで受け継がれてきた通鯨唄を地域住民の前で堂々と唄うことが、地域貢献への第一歩ではないだろうかと考える。

2　課題

(1)　少子高齢化による伝統の担い手の不足

通地区は、前述したとおり人口１０００人弱の町であり、少子高齢化が進んでいる。そのため、伝統を受け継ぐ人々も高齢化が進んでいる。通鯨唄保存会も高齢化が進み、指導に来られる人数も年々減少している。町の立地条件（島の端にあり、交通の便が悪い。病院は無く、商店も少ない。）も相まって、今後も少子高齢化が進むことが予想される。そのときに、今の小学生が通の町に愛着をもち、郷土に誇りを持ち続けることで、伝統を絶やさず、後世に残すことができるだろう。そのためにも、これからも通鯨唄を中心に、郷土に愛着と誇りをもつことのできる教育活動を展開していきたい。

(2)　児童数や教職員数減の中での教育活動の在り方

本校の児童数は年々減少の一途をたどっている。ここ２年間新入児童がなく、このままだとさらなる学級数減が予想され、それに伴い、教職員数も減ることが予想される。そのとき、このままの活動を継続することは困難になり、教育活動の精選が求められるだろう。何を大切に考えて残すのか、教育的意義や残された環境を最大限に活かしながら、よりよい教育活動を仕組む必要性がある。

【参考・引用文献】

小学校学習指導要領解説編　総則編　東洋館出版社　p160-161　H30.2
『明るい未来を創る山口県の連携教育』パンフレット　山口県教育委員会
「令和５年度長門市学校教育基本方針　ながとに学び、未来に生きる」リーフレット　長門市教育委員会
郷土の歴史年代表　野上　弘巳　H10.10
北浦捕鯨物語　松村七楼　藤田謄写堂　S59.4
長州・北浦捕鯨のあらまし　河野良輔　長門大津くじら食文化を継承する会　2018.3